

消えない思い出

山城26回 増 川 稔 晃

今から三十数年前、新しい高校生活に夢膨らませ、山城高校の正門をくぐった私たちを出迎えたのは、薄汚れた白いテントと、ハンガーストライキの数名のメンバーでした。

昭和四十四年の「東大安田講堂事件」をピークに、大学紛争の波は高校にも押し寄せていました。中学にも「山城では卒業式が行われなかった」とか「入学式も無事にすむはずがない」とかいう無責任な噂が流れてきていました。ところが幸いなことに、私たちの学年は非常に落ち着いており、入学式も卒業式も平穩無事。少し拍子抜けしたというのが正直なところです。

しかし、授業や生徒会等の自主活動に対する姿勢は積極的（？）で、「授業がわからない」と言って先生を突き上げ、一時間も二時間も授業をできなくしたり、「自主休講」と称して、S館の屋上にクラス全員集まったりと、結構いろいろなことがありました。ただし、単なる授業妨害ではなく「やる時にはや

る」ということで、自ら学ぶ姿勢は強かったと思います。その結果が、例えば国立大学をはじめ、有名私大にも現役で数十名合格するという形で現れていたのではないのでしょうか。

とにかく数々の出来事が、あえて思い出さなくても消えずに残っています。一時間目から六時間目まで授業をつぶして行われた生徒総会、体育祭と併せて一週間近く行われた山城祭（中庭にずらっと並んだ模擬店やゲームブース、夜遅くまで行われた後夜祭、ロックコンサートなど）、定期テスト後の球技大会、琵琶湖でのボート大会、毎朝休講掲示板に群がる生徒たちの様子、E館とS館との渡り廊下で教師と激論を交わす生徒たちなどなど。授業にかんしてもその中身まで、先生の一言までおぼえているものもあります。

三十年以上経ってもこれらの思い出がきえないというのは、いかに山城が素晴らしかったかという証拠ではないでしょうか。何回かの建て替えによって当時を偲ばせるものは、現在の山城には残っていません。校舎の名称もかろうじて「N館」「W館」というのがのこっているだけです。でも私たちの頭の中には当時の山城が残っています。二十六期生は不定期にですが同窓会を開き、当時の思い出を語り合っています。連絡のつかない方々で、これを読まれた二十六期生の方、ぜひ代表幹事に連絡を取ってみてください。